怪盗ルネットの怪盗学

ものかき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
怪盗ルネットの怪盗学

【Ｎコード】
Ｎ９３３４Ｓ

【作者名】
ものかき

【あらすじ】
世界は、あらゆる大物怪盗を世に送り出した。だが、現代において怪盗という職業は、食っていけない職業のように思われる。
しかし！
いまここに、怪盗学を（無理やり？）学ばされた泥棒がいままさに怪盗デビューをしようとしていた。
その怪盗の名は―。

泥棒は屋敷に侵入した！（前書き）

いまからこれを読む人の中には怪盗に対して独自の理想をお持ちの方もいるかと思いますが、この小説はあくまで彼らの理論なので、たとえ自分の理想と違うとしても、どうぞ最後までお付き合い願います！

では、本編をどうぞ。

泥棒は屋敷に侵入した！

ロンドン郊外は今日もにぎわっている。二階建てバスに乗り遅れるもの、女性に手を貸す英国紳士、スクール通いの学生たち・・。王国の首都は時計台の音と共ににわかに活気だっていた。
古くからの文化と、最新の流行が行きかう町、ロンドン。現代ではあまり多く見られない王政の残ったイングランドの首都である。

ドン！
さまざまな人々が行き交う道路の真ん中で、仕事のために早足で歩いていた、スーツに中年の男性は、浮浪児のような格好をした少年―少年というにはまだ早すぎるーとぶつかった。彼は中年男性と反対の方向に向かう途中だったらしい。
「おっと、ごめんよ」少年は飄々とした口調で言った。中年男性は顔をしかめる。
「おい、ちゃんと前を見て歩いてくれ」
「あはは、ごめんって」
中年男性の忠告が少年に伝わったかどうかは微妙なようだった。少年はぼろきれをつなぎ合わせた帽子を被った頭をかき、舌を出して走り去っていった。
男性もそんな無礼な少年にいつまでもかまっているわけには行かず、また前を見て歩き出した。
いまので、次の仕事までの時間に支障が出なければいいが・・・。
男性はそう思って、時間を確認するために、スーツの懐に手を入れた。なかに愛用の懐中時計―今では見かけなくなった―をとりだそうとするが・・・。
「あ」
男性は声を上げた。

懐中時計が、無い。
その瞬間、先ほどの浮浪児のような格好をした子供の姿が一瞬でフラッシュバックする。そして、男性の怒りが沸点に達した。
「あのガキ・・！」
そう、中年の男性は運悪く、その少年とぶつかった拍子に・・・。
「ｐｉｃｋｐｏｃｋｅｔ！！（スリだ！）」
男性は叫んだが、すでに街中に、その少年の姿は無かった。

「へへーん、ちょろいね！」
少年は男性が見えないところまで走り去ると、手の中の懐中時計を眺めた。金色の装飾が太陽の光できらきら光る。
少年はぼろきれをつなぎ合わせたキャスケットを脱いで額の汗を拭いた。
彼の風貌は文字通り貧困層の子供が着る服装だった。布が擦り切れたのか、ひざ宛てやひじ当ての布をもう一度ぬい、ところどころに汚れのついたズボンにワイシャツを着ている。
少年の名はユートという。
若い彼の職業は―泥棒だった。
彼は懐中時計を眺めながら言う。
「しっかし、さっきのおじさんは格好のカモだったなぁ」
先ほどの男は、身なりがいいわりに無防備なことこの上なかった。
泥棒であるユートには願ってもいない相手だ。
「まあ、大仕事の余興にはいい懐中時計だな・・・質屋に流そ」
ユートはそういって、懐中時計をポケットの中にしまう。そして、歩き出した。
彼の口ずさんだ『大仕事』とはいったいなんなのか。
泥棒というのは、本来綿密な計画を立てるよりは、証拠の残りにくい標的を絞って速やかにその場で盗みをするのがユートの思う『泥棒』なのだ。
しかしそんな泥棒も時に、何日もかけて下調べをし、その日のため

の準備をする大仕事がある。
泥棒の一大イベント―空き巣である。

今日ユートが空き巣に入る標的は、ロンドン郊外を少し離れたところに構えられた屋敷、デュボアール邸である。
名門貴族にしてたいそうな資産家のデュボアール家はロンドンの財政に少なからず影響を与えている強い権力と財力を誇る家であるにもかかわらず、その実態は謎の多い貴族であった。
そんなデュボアール家は今日、どこぞの社交会に参加するために、一家総出、使用人もこぞって家を離れるらしい。
我ら泥棒には願っても無いチャンスだ。
なぜなら、財産が豊富なかの家の屋敷の警備が、笑ってしまいたくなるほど手薄だからだ。
どれぐらい手薄かというと、何百年という歴史を持つ由緒あるその邸宅の鍵は、その当時より形を変えておらず、つまりセキュリティは何百年前と一緒ということになる。
そのうえに、その家の警備は庭にいる番犬にまかせっきりだというのだから、自らカモになれといっているようなものである。
ユートは下調べで得たそれらの情報を思い返しながら、屋敷から少しはなれた立派な大木の上によじ登り屋敷の様子を観察した。
窓の中では、使用人たちがあわただしく働いている様子が見えた。
社交会の準備で忙しいのだろう。ご苦労なことで、とユートは思った。
彼は屋敷を複雑な気分で眺めてため息をついた。
―やっぱり、貴族の生活というのは、優雅なものなのだろうか。
物心ついたときからスリ、盗み、強盗の真似事・・・あらゆる犯罪で生計を立ててきたユートには、貴族の生活というのは想像もつかない世界だろう。
その考えにまで至ったとき、ユートはハッ、として首をぶんぶん横に振った。いやいや、今は貴族の生活のことは自分には関係ない。

そんなことを考えていたら、空き巣の妨げになる。
木の葉が、ユートが首を振るのにあわせてゆれ落ちた。どっちにしろ、あの屋敷は格好の獲物、そして自分はそれを狩る狩人。ユートにとってデュボアール家はビジネス的な関係しかないのだ。
ユートから見える屋敷の部屋にはデュボアール家の令嬢がいるらしいのだが、今はその姿が見当たらなかった。社交会に出るために派手な化粧でもしているんだろう。ユートはそう思った。

★

日没―。
デュボアール家低の正門からいくつもの馬車が出発していく。この現代に馬車が何台も出回るという点は、いまのユートにツッコミを入れる気力を起こさせなかった。
とうとう犯行決行のときが来た。馬のひづめの音が遠ざかっていくにつれ、そんな気持ちが強くなる。
「よし・・・全員発ったな・・・」
木の上に隠れていたユートは、それを確認するとスルッ、と軽業師のような身のこなしで木から飛び降り、着地した。
そして、今度は屋敷に一番近く、やや枝が頼りない木に登って木の枝を伝った。
そこから下を除くと、黒い番犬が五頭ほど芝生を闊歩していた。獰猛なドーベルマンだ。
ユートは、隠し持っていた肉塊をボトッ、と地面に落とした。一斉に番犬はそっちに向かってくんくんと匂いを嗅ぎに行く。今だ。
ユートはサッ、と枝から芝生に着地、全力で屋敷に向かって音も無く走る。
番犬の気がそれる前に屋敷の壁によじ登った。
「・・・ふう、ちょろいね」
ユートは壁のくぼみにしがみつきつつも、小さくそういってみせた。

屋敷の裏口、本来なら使用人たちが出入りするドアの前に、ユートは立った。
何をするかと思ったら、彼はどこからか長い針金のようなものを取り出し、鍵穴にガチャガチャと差し込む。
ガチャッ。
数分もしないうちに何百年前から形の変わらぬ鍵穴は、すんなりと開いてくれた。よしよし、素直な奴だ。
ユートは屋敷に入る。その中は、し・・んと静まり返っていた。
彼は足音を立てないように慎重かつ迅速に走った。しかし、廊下に入ると床は絨毯になったので、さほど気にせずに走ることが出来るのだが。
今日、彼のお目当ての部屋は女性の部屋だ。手に持ち歩ける盗品は女性が見につけているアクセサリー類が一番いい。
なぜなら、骨董品や、廊下に飾っている振るい甲冑やいわれのありそうな置物、金庫などはユート一人では持ち運べないからだ。
仮に盗めたとしても、大きい盗品は逃げるときにどうしても邪魔になる場合が多いのが難点だ。なので、盗むなら女性のみにつけるものに限る。
実に合理的な考え方だ。誰かに自慢したい、とユートは半分本気で思った。
いまからユートが向かうのは、デュボアール家の令嬢の部屋だ。そこなら自分でも持ち運べるものが必ず置いてあるはずだ。
ユートはそこへ急ぐ。部屋の位置は頭の中に叩き込んである。その部屋の前まで行き、壁にぴたっと張り付いて中の様子を窺った。ドアノブを握り、ゆっくりと開く。
キィイ・・という蝶番のきしむ音がした。
そこには―。
輝くような金髪がさらりと揺れ、白い肌が際立つりんとした顔がこ

ちらを向く。
その目は深い、吸い込まれるような森の緑だった。長く伸びたまつげがうつむき加減に瞬きをする。
その人がゆり向いた拍子に質素のドレスも一緒になびく。
ユートの思考が停止―。
「誰？」
ハッ！その言葉でユーとは我に返った。待て！どうして屋敷に人がいるんだ・・！？
「やっべ・・・！」
ユーとはあわててドアを閉める。なぜだ！？なぜここに人が・・！？心臓がバクバクする。
待て、落ち着くんだ・・・。
もしかしてあれは幻覚か！？ここの屋敷の者は間違いなく社交会のために出払っているはず・・・。
ユートはもう一度ドアを細く開けた。キィイ・・という音がする。
―やっぱりいるっ！
ユートは慌てて音も無くドアを閉めた。
だめだ！作戦は中止・・・人に見られては元も子も・・・彼が後ずさりした、その時・・・。
ドンッ！！
「ぐえっ！？」
後ろからものすごい力で背を押された、（殴られた！？）ユートはわけも分からず部屋の中につんのめる。
「いってぇ・・・誰だ・・・！？」
倒れこんだときに打ち付けた頭を抑えながら後ろを揺り返ると、そこにはティーセットを載せたカート、そしてそれを押しているのは黒ずくめの執事・・。
まさか、自分はカートで体当たりされたのか・・・？！
「おや、何かを押し倒してしまいまし・・・」
カートの向こう側で声がした。執事がユートのほうをのぞくと、執

事、絶句。
―俺に気づくのが遅せぇ！
ユートは、自分が見つかったことより、そっちのほうに驚いた。
カートから顔を見せた執事は、青年というには大人びているが、執事をするにはまだ若い男だった。
「何者・・・！？お嬢様、ご無事ですかっ！」
執事はいまさらながら切羽詰った声で叫んだ。
「おまっ・・・！侵入者を張り倒した後に言う台詞かよ！？」
危険な状況にありながら、このワンテンポずれた青年執事にツッコミを入れてしまう。その執事は、慌てて『お嬢様』と呼ばれた少女のほうへ走って駆け寄った。
「無事です」
少女は小さく言う。執事は少女を庇うように手を広げてユートの前に立ちはだかった。
「貴様、賊か！？どこから入った！？」
「・・・・」
執事が恐らく威嚇してユートに叫ぶ。迫力がまったく無かったから威嚇したのか、脅したのかまったく判別できなかったが。
しかし、ユートからすればその行為は執事失格だ。彼は立ち上がり、両手を挙げる
「おいおい・・・俺はそんな怪しいもんじゃねぇって・・・ちょっと」
そういってヒュッ、とユーとは執事との間合いを一瞬で詰めた。
「な・・・！？」
執事が気づいたときには、すでに遅い。ユートは執事の首筋に手刀を叩き込んだ。
ドサッ、と崩れ落ちる執事。ユートは目を見開いた
「ええ！？あっけない！結構強いと思ってたのに」
そして、ユートは少女を見た。
「だめだって、侵入者に喋る隙を与えちゃ。執事なら主人の安全の

ため、侵入者には有無を言わせず瞬殺しろっての。そうこいつに言っといて・・・それにしても弱っ・・・」
ユートは哀れみのまなざしで倒れる執事を見下ろした。どうやら、この様子ではさっきユートを張り倒したのは偶然らしい。
少女は、目の前で執事が倒されてもあせったり、おびえたりする様子はなかった。むしろ冷静すぎるぐらいの物腰だった。
「あーあ、家のもんに見つかっちまった。さっさと退散するかね・・・」
ユートは興味なさ気に言った。少女の反応がいまいち面白くなかった。ユートは出口に向かう。しかし。
「待ってください」
少女が静かに凛と言った。ユートの動きが止まる。
「・・・なんかあんのか、『お嬢様』？」
「あなたは、泥棒ですわね？」
「・・はあ？」
ばかばかしい少女の質問に、思わずユートは振り返る。そこには、何も変わらぬ少女の姿。
「・・・・何言ってんの？」
ユートには、少女の質問の意味が分からない。
「あなたは、泥棒ですね、と確認しているのです」
「あんた、お嬢様の癖にやけに余裕じゃないの？」
ユートは少女に歩み寄る。
「俺がそんなに優しくない泥棒だったらどうするんだ？ばれちまったからには、あんたを殺しちまうかもしれないんだぜ？」
「それは不可能です」
「・・・はあ？」
ユートの脅しに、少女は冷静すぎる口調で返した。
「どういうことだよっ・・・？」
ユートはその後に、言葉をつむごうとした瞬間、体に違和感を覚えた。

―体が、重い・・・？
「なん、だ・・・？」
舌がうまく回らない。ユートはガクッと床にひざをついた。苦しそうに少女を見上げるも、視界がぼやける。
「なにを・・・し・・？」
「あなたが先ほど倒れこんだ絨毯に、少々特殊な薬をまいておきました・・・といっても、すこーし効力の強いただの睡眠薬ですわよ？」
少女が天使か悪魔か分からぬ微笑で、小さくつぶやいた。
「なんだと・・・・すいみ・・・」
ユートは全てを言い終わる前にストン、と眠りに落ちた。

泥棒は屋敷に侵入した！（後書き）

読んでいただき、ありがとうございます！
探偵の次は怪盗ですね。ベタですね。はい。
最近そういうのしかかけていません。ちょっと視野を広げるべきだとは思いますが。

ロンドンも、怪盗も、全て付け焼刃です。それでも最後までお付き合いできたら、と思います。
怪盗についての会話が出るのは、恐らく次の部の予定です。
更新がいつになるかは分かりませんが、続きをどうぞ！

泥棒は取引という名の脅しを受けた！

いくらかの時間がたち、おぼろげながら視界がだんだんと晴れてきた。照明の光が網膜を刺激する。
―あれ、俺どうなったんだっけ・・？確か、屋敷に盗みに入ってそれで・・・。
「あ」
ユートは完全に意識を取り戻した。そうだ、俺は変なお嬢様に睡眠薬を！
彼がきょろきょろと辺りを見渡してみると、そこは先ほど自分が倒れたデュボアール家の令嬢の部屋だった。
ユートが体を動かそうとするが、ギシ、と手に縄が食い込む音がした。手足の自由が利かない。
首をひねって手足を見てみると、ユートは椅子に手足を縛られていた。
「えええ・・・・？」
この状況はどういうことなのだろうか。ユートには理解がいかなかった。いや、その状況自体を説明するのは簡単だ。
―俺は盗みに入り、眠らされ、手足を縛られている。そこまではいい。
しかし、自分は空き巣犯であるから、目覚めた後、最初に視界に入るのが警察署の天井でも何もおかしくは無い。むしろそれが普通なのだが。
そこまで考えて、ユートは中途半端ながら状況を理解した。なぜか自分は警察には通報されず、部屋に拘束されている。
「なんなんだよ・・・？」
そういったユートは目の前に広がる謎に眉をひそめた表情になっていた。
「目が覚めましたか？」

「あ？」
そのとき、背後で声がした。囁くような声、ユートは声の主がすぐに分かった。
彼はその方に振り向こうとするも、九十度後ろを振り向くには、梟になるほか無かった。
ユートは、無理やり見えない声の主を目で探そうとすると、視界に先ほどの『お嬢様』が入った。ユートはその姿を確認すると、冷や汗混じりに言う。
「これがどういうことか説明して欲しいね」
すると、少女は意地悪そうな笑みを浮かべながら言う。
「もちろん、あなたは空き巣犯なのですから、こうして椅子に縛り付けているわけですわ」
「話をはぐらかすなよ？どうして警察（ヤード）を呼ばない？」
「あら、どうでしょう？呼んだかしら？」
「意味が分からない。まさか、呼んでないのか？」
ユートは少女の曖昧な答えに、いらいらしながら尋ねた。頭をかきむしりたいところだが、あいにく手足は使えない。くそっ。
「私が警察を呼ぶかどうかは、あなたの態度次第ですわ」
少女がにっこりと笑ってユートに近寄る。
「なんだと？」
ユートはますます眉をひそめて低い声で唸った。つまり、まだ警察は呼んでないのか？
「お嬢様、その泥棒から離れてください！」
ユーとの背後で声がした。恐らく、先ほどユートが瞬殺した執事だろう。もう目が覚めたのか。
ユートは声のした方を振り向こうとして、いまの自分にはそれが出来ないということを思い出した。
こんなに近くにいる声の主の姿が見えないというのは、こんなにもいらいらするものなのか。ユートは改めてそう思った。
そのいらいらが相手側に伝わったのか、関係ないのか、執事はあわ

ててユートの視界に入り込み、自分の近くにいる少女を引き剥がすように遠ざけた。
「お嬢様、こいつは犯罪者ですよ！？」
「あら、叩かれたところは痛くはありませんの？」
少女は、執事の叫びを無視してのほほんと聞いた。執事のほうはあきれ返ってため息をつく。
「私などのことより、自分のご心配をなさってください」
そういう執事に少女は、あらかじめ準備していたらしい氷水を執事に手渡した。
―つまり、譲さんはこいつが倒されることを予想していたということか。悲しいことだな・・・。
ユートは自分が縛られている立場にもかかわらず、若き執事に対して同情した。彼がおとなしくそれを受け取ってしまったところをみて、ますますその気持ちは強くなった。自分の手刀は思った以上にダメージだったらしい。
執事は氷水を首に押し当てながら申し訳なさそうに頭を垂れた。
「空き巣相手に不覚を取ったこと、深くお詫び申し上げます。なんと言えばいいのか・・・」
すると、少女はさらりと言った。
「大丈夫ですわよ？最初からその方であなたには何も期待をしていませんでしたから」
グサッ！少女の言葉が執事の胸に刺さった。
「ぐ・・？」よろめく執事。
「あーあ、やっぱりね」ユートは二人に聞こえないように小さくつぶやいた。この屋敷で彼がどういう立場なのか微妙だ。
「おーい。そろそろ俺を無視しないでくれ」
ユートは二人のコントのような会話にそろそろ飽きてきたので、縛られながらも軽口を叩いた。
「あら、そうでしたわね」
少女はいままでユートの存在を忘れていたかのような口調で言った。

ユートは妙にいらいらする。
「そうですね、取引をしませんこと？」
「取引ぃ？」
ユートは面倒くさそうに語尾を伸ばして鸚鵡返しに聞いた。なんだか、胡散臭そうなことに・・・。
「あなたが私の提案する取引を受けてくれれば、わたしはあなたを警察に突き出さないようにします」
なんだか、怪しい雲行きになってきた。こういう話には、裏があるのが世の理（ことわり）というものだ。
「もし俺がその取引に応じたとして、俺をちゃんと逃がす保障があるのかよ？」
ユートは、そういいながら内心冷や汗をかいていた。なぜって、取引を持ちかける彼女の目がとてもきらきらしているからだ。
「もちろん、保障はしますわ！私の願いを聞いてくれたなら」
「・・・で。その願いというのは」
少女は、ユートがそう聞いてくれたのがよほどうれしかったのか、くるりと一回転しながら言った。
「私があなたを見逃すための条件、それは・・」
ユートはごくりとつばを飲む。

「あなたが、怪盗になることですわ！」

「・・・・」
ユートの全思考が停止。
いや、それどことか、この部屋全体の時間が止まったかのようだ。
「・・・・いま、なんと？」
ユートはかろうじてそれだけを口にすることが出来た。その後はよく聞こえなかった。いや、聞こえて欲しくなかった・・・。
「だから」
しかし、少女は無情にも、聞こえて欲しくない単語をもう一度口に

してしまった。
「私が、あなたを一流の怪盗へ育てあげますわ！」
「・・・・」
ユートは一拍おいて・・・。
「はぁあああ！？」
と叫んだ。
「な、なんだとっ！？」
絶叫に近い悲鳴で声が裏返るユート。
「何を考えてやがるっ！？怪盗だとっ！？」
「ええ、そうですわよ？」
少女は平然と答える。
「怪盗って、あの、怪盗かよ！？」
「怪盗という単語に二種類の意味が存在するのですか？」
―怪盗！？回答でも解凍でもなく、あの怪盗！？
「あの、いちいち予告状とか出してわざわざ自分から姿を現して『ふはははは！』とか叫んで宝を盗んで消える、あの！？」
「何回言い換えても同じですわよ」
少女は往生際が悪いな、という表情でため息をつく。その顔もまた美しい。しかし、いまのユートにはそんな少女の表情を読み取る心のゆとりが無かった。
「いや、待て待て待て！どうして俺が！？」
「あら、泥棒さんのあなたなら、怪盗に憧れを持っているのは当然だと思っていましたが・・・」
「冗談じゃねぇ！どうしてわざわざ盗むターゲットを盗みにくいものにして、予告状まで出して自分が捕まるリスクの高まるようなことを泥棒がしなきゃいけない！？そんなんじゃ捕まって終わりだ！食ってけない！怪盗は！」
すると、少女はパン、両手を叩いた。
「心配には及びませんわ。それなりの報酬は用意させていただきますわよ？」

「やなこった！俺はつかまるわけにはいかないんだ！泥棒として！」
「あら、それではあなたを今すぐ警察（ヤード）に通報してもよろしいのですわよ？」
「ぐっ・・・」
ユートは、少女にそういわれて自分が手足を縛られ身動きを取れない状況だということを思い出した。話に夢中ですっかり忘れていた。
「ロイ！電話をここまでもってきて！」
少女は叫んだ。すると執事はかしこまって電話を少女の前まで引っ張ってきた。どうやら、今のは彼の名前らしい。
少女は、いくらか年代が昔の、骨董品のような電話の受話器をとって、ユートを見た。
「さて、警察へ連絡する番号は何番でしたでしょうか？」
「ま、、まて！はやまるなっ！」
ユートは今までに無いぐらい必死に叫んだ。生まれてこの方犯罪以外のことをしてこなかった自分が捕まった日には、刑務所から出られる日はいつになるか。つかまるのだけは避けたかった。
しかし何より、今まで一度もつかまったことが無いユートにとって逮捕されるというのは、単純なことではなくなっていた。泥棒人生に傷がつくといいってもいい。
「あら、怪盗になってくれる気になりましたか？」
少女はユートの反応にダイヤルを回す手を止めた。
「ひとつ聞きたい！俺が怪盗になったとして、あんたに何の得になるって言うんだ！？まさか、ただの暇つぶしか？」
「あら、無駄な詮索はおよしになって」
少女はさらりとそういってのけた。「私が聞きたいのは、『ＹＥＳ』のひとことだけですわ」
「てんめぇ、立場が有利だからって、上から目線になりやがって・・・」
ユートが恨めしげに言うと、少女は天使の微笑でダイヤルを回し始めた。

「わ、わかった！待て、待て！」
ユートはダイヤルを回された途端に弱弱しい声になる。
「どうなのですか？」
「ぐ・・・・」
―くそっ、警察に通報されないためには、やはり、こいつの言うことを聞くしかないのか！？
「・・・・・くそっ！やればいいんだろう！？ただし、もし俺が捕まったら、あんたも共犯だって白状してやるからなっ！」
「あら、あなたは素質がありますから、私の教育を受ければ、警察には捕まらない立派な怪盗になれますわよ。心配ありません。私の目に狂いは無いっ！」
少女は自信満々にユートをビシッ！と指差した。
「教育・・・あんた、どこの家庭教師（チューター）だよ？」
自分の立場を忘れ、思わず突っ込みを入れるユート。
―ああ・・・おれ、これからどうなるのだろうか・・・。
「なんなんだ、こいつらは・・・」
聞こえないようにユートは一人つぶやく。少女は縛られたユートの前で、ドレスの裾をつまんで優雅に一礼した。
ドレスがひらりと舞った。
「私は、アリシア・ド・デュボアールと申します。どうぞ、お見知りおきを」
少女がそういった瞬間・・・。
ふらり・・。
少女が傾いた。
「は？」
「お嬢様ぁ！？」
ロイという名の若い執事があわてて少女―アリシアにかけより、その体を受け止める。
ユートは面食らってアリシアを見た。そして、首をひねる。
―まさか、倒れたの？

泥棒は予告状を届けるという名目でパシられた！

一方、時間は過ぎユートがデュボアール家に拘束された次の日の夜明け。
ロンドン警察署（スコットランドヤード）―。

「なぜ事件が起こらない日に限って非番じゃないんだ！」
警部であるマーク・スタンレーは暇をもてあました勢いで叫んだ。
署内に彼の声が響き渡る。
スタンレー警部は、現在五十二歳と高齢で、スコットランドヤードでも古株だ。顔のラインは頬から目の輪郭まで全てほぼ直線、というとっても覚えやすい顔だ。
そんな、彼が理不尽な叫びを上げたのには理由がある。
彼の肩書きは、スコットランドヤード警部にして、『おじいちゃん』というもう一つの肩書きがあるのだ！
妻子に恵まれ、今では孫にも恵まれた五十二歳の若きおじいちゃんである。
そんな肩書きの彼は、最近非番なのにもかかわらず急な事件で呼び出されることが増えている。まさに『老体に鞭打つ』だ。
「本来なら前回の非番のときに孫たちと北のほうへ日帰り旅行に行っていたはずなのに！！非番の日に事件だと呼び出される！しかし、いざ当番の日になってみれば、なんだ！この仕事の少なさは！」
前記の理由でスタンレー警部は署内に部下がいるのにもかかわらず不謹慎な叫びを上げたのだった。
部下の警官たちはというと、各々の作業に集中し、スタンレー警部口に耳すら傾けなかった。もはや、この高齢の愚痴の叫びという行事には慣れっこなのだ！
さらに、彼らは最近、驚くべき団結力で、場の空気を『俺たちはもっとそうなんだよぉ！』というオーラにするという高度スキルを習

得したのだ。
しかし、そんな空気をこの愚痴警部が読み取れるはずも無い。もし読み取れるような聡い性格なら、最初から部下の前であんな叫びはしないはずだ。
しかし、そんな愚痴警部スタンレーを憎む部下、および同僚は誰一人としていない。
なぜなら・・・。
「おい！お前たち！今日の仕事が終わったらバーで飲むぞ！わしのおごりだ！」
その瞬間、場の空気を作り上げていた部下たちが一斉に声を上げた。
「やった！警部最高です！」
「今日は飲むぞ！」
「警部、ヤード全員でバーに押しかけるのはどうかと・・・！」
口々に声を上げる部下たち。
スタンレー警部が嫌われない理由、それは懐の深さである。
そんな時―。

「警部――――！」

いきなり部屋の中にスコットランドヤード特有の制服を着た警官が、けたたましい音を立ててドアを開けながらあわただしく入ってきた。
警部は顔をしかめる。
「どうしたんだ、そうぞうしい」
すると、警部の前までやってきた警官が、手に持った白い封筒を差し出して、息も切れ切れに言う。
「警部・・！か、か・・・」
「か？まさか・・」
警部がゴクリ、とつばを飲む。
その緊迫した様子に、警官は状況を理解してくれたらしい、と思ったのか、こくんとうなずいた。

「か（・）くれアジトが見つかったのか！？どこかの組織の！」
「違いますっ！か・・」
「じゃあ、『カ（・）メラ盗難事件』に進展が！？」
「どんな事件でありますかあっ！？それはっ！ですから」
「カ（・）ーネルサンダースの像がドウトンボリとかいう川から見つかったことの報告か！それならジャパンニュースの放送で見たぞっ！」
「もはや事件でもないでありますっ！警部ッ！ちょっと人の話を黙って聞くのであります！」
警官は、先ほど走ってきたときよりも息を切らして叫んだ。どうして自分の話をまず聞かない！？この人は！？
「じゃあ、なんなんだ」
警部がじれったそうに聞いた。
警官は、ここぞとばかりに深呼吸をして叫んだ。「か―」

「怪盗から予告状が届いたのでありますっ！」

部屋の中が静まり返った。警部が黙っただけではなく、作業をしていた部下も、電話中の人間も、その部屋で警官の話を聞いた全員が沈黙した。そして―。

「なにぃいいいい！？」

警部の叫び声が署内全域に響き渡った。

ユートが目的のものをそこらの警官に渡すと、彼はロンドン警察署（スコットランドヤード）を後にした。
数分後に誰かの叫び声のようなものが聞こえたが、気のせいだと思って、またそのまま歩き出す。

―まったく、とんだことになったな・・・。
そう思いながら、ユートは昨日の出来事を思い返した。

★

―え、倒れた？
ユートは、目の前で倒れたアリシアとそれを支えるロイを見て、縛られたまま面食らった。何が起こったのか・・・・さっぱり展開について行けない。
「お嬢様！しっかり！」
分かるのは、アリシアがなぜか倒れた、ということだけ。
ユートの頭上ではてなマークが数百個単位で飛び交う。
―え、何が起こったわけ？
盗みに入って失敗して眠らされ縛られ脅され目の前で倒れられ。まったく、この屋敷にいると暇しない。
決して褒めているわけではない。こんなイベントオンパレードなど二度とごめんだ。濃いＲＰＧでもこんなに一斉にイベントが起きてはプレイヤーがついて行けないはずだ、とユートは思った。
アリシアお嬢様はというと、気を失っているその白い肌が赤く染まり、息はとっても荒い。汗もかいているようだ。
―まさか、こいつ風邪か？
ユートは、首をひねりながらもこの結論に達する。
―だとしても倒れるタイミングが良過ぎだぜ、お嬢様。心臓に悪い・・・。
「お嬢様、お体が強くないのですから、無理をなさらずにとあれだけおっしゃいましたのに！」
ロイが悲痛にそう叫ぶので、ユートはのんきに、しかしすかさず言った。
「あーなるほどね。んなら、お嬢様が暴走する前に止めろよ、執事だろ？」

「うるさい！空き巣犯の分際で！」
「んだと？」
ロイはユートに向かって鋭い双眸で睨んで叫んだ。ユートは、そんな執事の反応に噛み付くような顔になる。俺が何か間違ったことでも言ったか？
どうやら、ロイはユートのことを敵視している様子である。
しかし、その後の執事としての彼の行動はすばやかった。
ひとまず、アリシアをユートの後ろにある―つまりユートから見えない―天蓋つきベッドへおく。
そして、すぐに水の入った洗面器とタオル、さらには水差し、コップ、薬まで完全に用意した。
―あんた、手際がよすぎないか？なんだ？こんなことがしょっちゅうあるのか？
ユートは、ロイの様子を首が痙攣するまで曲げた状態で見届けて、内心で突っ込んだ。
「おーい、大丈夫かよ？」
「お嬢様は生まれつきお体が強くなく、立っているのもやっとなお方だ。いまは少し興奮して体調を崩されただけだ。心配される筋合いは無い」
「あ、そ」
ユートは面白くなさそうに言った。
―本当はあんたの多忙ぶりを見て言ったんだが・・・まあいい。
「空き巣犯！」
「あ？」
ロイはユートの背後に回り、彼を縛る縄を解いた。
拘束を解かれたユートは、縛られていた手首をさする。本当は縄が食い込んで痛かったのだ。
ユートは眉をひそめて聞く。
「おい、俺を解放していいのか？」
「勘違いするな。逃がすわけではない。今日のところはお嬢様の身

を考えて去ってもらうだけだ」
ロイは冷たく言い放つ。当たり前だが、アリシアと話すときとは態度が百八十度違う。
―しかし、それにしても俺に対しての喋り方が執事っぽくないのな、こいつ。執事の癖に。
そう内心で舌を出してなじるユートに、ロイは白い封筒を差し出した。
「・・・なんだ？これ」
ユートは怪訝そうに眉をひそめて尋ねた。そして、わけの分からないままそれを受け取ろうとする。しかし、その前にロイは封筒をひょい、と上にあげた。
「指紋はのこすな」
「あ？なんで？」
「お前はそれを、スコットランドヤードに届けるからだ」
「は？どういうことだよ」
「ここまで言ってもわからないなら、説明する気も失せる。さっさとそれを届けて来い」
「おい、なんでてめえが命令口調なんだよ」
ユートの血管が浮き出る。ロイは平然とした顔で続ける。
「お嬢様の言いつけだ。くれぐれもそのまま逃げようなんて考えるな。明日またここに来い」
「俺が素直にその言葉を聞くとでも思ってるのか？」
「もしそうした場合、お嬢様が黙ってはいない。どういうことかわかるか？」
「ぐ・・・」
ユートは、ロイの言葉に悔しそうにうめいた。絨毯に睡眠薬を仕込んだり、空き巣犯を縛り付けて脅したり、何をしでかすか分からないアリシアのことだ。ユートが逃げたと知ったらどうするか・・・。
「わかった。ここに来りゃいいんだろ、来りゃ！！」
「わかったらさっさと行け」

「うるさい！戦闘力０（ゼロ）執事！」
ユートの言葉をロイは完全無視した。そのままアリシアを介抱する。
ユートは「けっ」と悪態をついて窓のほうに向かった。ユーとの中では、泥棒は窓から出るというのが鉄則となっている。しかし―。
「言っておくが」
アリシアの介抱に忙しいロイは、ユートの方を見もせずに言った。
「その窓ははめ込み式で開けられない」
「・・・」
ユートはそういわれた瞬間、窓の前で棒立ちになった。たしかに、その窓は格子も鍵も何もついていない。完全に壁と一体だ。
―俺はどこから出るんだよ・・・？
途方にくれるユートだった。

★

「まったく、変なやつらにかかわっちまった・・・」
ユートは昨日の出来事を思い出してため息をついた。そして、彼はいま再びデュボアール家に向かっている。
―窓から入れないんじゃ、どこから入ろうか・・・？
ユートはデュボアール家の屋敷に着くまでそればかりを考えていた。

泥棒は予告状を届けるという名目でパシられた！（後書き）

やっと怪盗らしい展開です。予告状、ベタですね。
怪盗学のほうはどちらかというと泥棒学のほうになりそうで怖いです。
いや、大丈夫ですよ（汗）
次回はもっと怪盗らしい内容にしますから。

今時の泥棒は天井から現れる！

「来てやったぜ」
ユートはアリシアの部屋でそう声を上げた。
「ひゃっ！？」
ユートの声―いや、姿に驚いたアリシアがベッドの上で叫び声をあげた。
ちなみに、ユートからアリシアの姿は逆さに見えている。
アリシアはベッドのタオルを握って叫んだ。
「どうして天井から現れますの！？」
「しょうがないだろ、窓が開かないんだから」
ユートは天井で逆さになったまま文句を言った。彼は、窓からの侵入が出来ないと知って、天井から侵入し、タイルをはがしてアリシアの部屋へ訪れたのだった。
キャスケットが落ちないように片手を頭に載せて器用にぶら下がっている。
そして、こうもりのようにぶら下がった状態から地面に飛び降りる。
そのときに空中で一回転しながらしっかりと地面に足をつけて着地した。軽業師のような軽い身のこなしである。
しかし、着地しても床に敷かれた高級そうな絨毯のせいで着地音がしなかった。まったく贅沢なもんだぜ、とユートはあきれる。
彼が着地したのと同時に、部屋のドアが開いて、外からカート―ユートを撃沈したあの―をひいて執事であるロイが入ってきた。
彼は天井から入ってきたまま着地姿勢でいるユートを見て。
「・・・」
そのまま紅茶の準備に取り掛かった。
「無視かよ」
ユートは顔を引きつらせて呟く。
「よく来てくれましたわ」

アリシアはベッドから降りてユートにいった。ビロード製の質素なデザインの服に身を包んだ彼女に、ロイがすかさず上着を羽織らせる。
そんな彼女に向かってユートは、そりゃ来なきゃあんたが何をしでかすかわからないからな、と心の中で言っておいた。
「昨日は大変、私の見苦しい姿を・・・」
「それは別にいいんだけどね。また倒れられたら困るから座ってくれない？俺さ、さっさと終わらせたいんだよね。説明を頼むよ。昨日俺がヤードに送った手紙の内容って何？」
「・・・・あら、ロイから聞いていないのですか？」
アリシアが心のそこから不思議そうな表情をして聞いた。そしてロイのほうを見る。
彼のほうはというと、鈍いこいつが悪いんだ、という表情でそっぽを向いて紅茶を入れていた。
ユートは、こいつらと縁を切る前に、この執事だけは一発殴っておこう、と心に決めたのだった。
アリシアは、ほっとため息をついて椅子に座った。そして言う。
「あれは―予告状ですわ」
そういうアリシアの表情は満面の笑みに包まれている。
「あ？予告状？」
ユートが口をあんぐり開けて言った。なんすか？それ。予告状って化石と同義語じゃないんですか？
「よ、予告状って犯行予告？聞いてない。いったい、どこに盗みに入るわけ？」
「・・・」
お嬢様はいったん黙る。そして。
「ああ、あなたには何も説明していませんでしたわ！」
ポンッ、と手を叩いてのほほんといった様子で言った。
―いや、そこ説明しろよ、お嬢様！
ユートは内心で突っ込んでおいた。

「ロイ、予告状を」
アリシアが叫ぶと、ロイは「かしこまりました」と腰を折って返事をした。
「予告状がここにあんの？」
「コピーですわ」
「・・・バックアップとってんのか・・・恐ろしいね」
ユーとがわけのわからないところで戦慄している間に、ロイが予告状のコピーを持ってきた。
「読んでご覧なさいな」アリシアが言う。

『諸君、初めましてとでも言っておこうか。
自己紹介などという堅苦しいあいさつは無しにしよう。
私は、この予告状が届いて五日後の午後八時に、ロンドン郊外に居住を構えるアンドリュー邸の主人が持つというリングを頂に参上する。
警察官（ヤード）諸君、それぞれのあいさつはそこでしようではないか。
会えることを楽しみにしているよ。では、五日後に―。
怪盗ルネット』

「・・・なんだ？このふざけた文章は？」
「ふざけてなどいませんわ！」
「ふざけてなどいない」
アリシアとロイは、ユートの発言に即座に同時にそう反論した。ユートはその迫力にひるみながらも、気になるところを聞いてみた。
「この文章の最後にある『怪盗ルネット』って、まさか」
「ええ、私たち、怪盗の名前ですわ！」
「・・・・・」
―いまさらだが、本当にやる気か？このお嬢様・・・。
ユートの困惑は、冷や汗として現れた。
「・・・・別に興味があるわけではないが、この『ルネット』って

どういう意味だ？」
「『ルネット』というのは、ドアや窓の上にある半月状のアーチのことですわ。フランス語では『小さい月』という意味ですの」
「どうしてこのチョイスにしたんだよ？」
「あら、ネーミングの由来が聞きたいのですか？」
「・・・いや、長くなりそうだ。やめておく」
ユートは、アリシアの目がとてもキラキラしていたので、すかさず手で制した。
ユートは、予告状のコピーをピラピラと振ってみてから言った。
「なあ、ひとつ思うんだけど・・・」

★

「いまどき予告状なんて、どうよ？」
ロンドン警視庁―。
スタンレー警部は証拠品扱いとしてビニール袋に入っている予告状を見て言った。
そして、その証拠品見ていた視線を目の前の警官に向け、静かに言う。
「君はどう思う？」
水を向けられた警官は、先ほど警部に予告状を届けた警官であり―現在、彼はなぜか取調室にて警部と向き合っている。
「警部・・・なぜ本官は取り調べを受けているのでありますか？」
「何、簡単なことだ」
警部は毅然とした態度で言った。
「ワシは君を、この現代では化石ともいえる予告状、を作った犯人だと思っているからなのだ！」
角ばった顔を険しくしてビシッ、と警官を指差した。警官は困惑する。
「なぜでありますか！？本官は怪盗ではないのであります！」

「いや、君が怪盗だとは一言も言っていない」
警部はそっけなく言った。そしてやさしく警官に顔を近づける。
「わかるよ、ヤードの前で数時間も仁王立ちになっているのは暇だよな？あ？わかるよ。どうしてもそういう心躍るような事件に遭遇したいよな？この際正直に白状しなさいよー」
「違うのでありますッ！この封筒はどこかの貧困層の少年が『変なやつからこれを渡せって頼まれた』とか言われたからにして・・」
「しらばっくれるんじゃないっ！暇をもてあましてこれを作ったんだろう！？」
バンッ！
スタンレー警部は安物の木のデスクを思いっきり叩いた。その振動におののく警官。
先ほどの『ドウトンボリ』の発言といい、いまの尋問といい、警部は日の丸に思いっきり影響を受けているらしい。
警官が彼の気迫に泣きそうになった、その時。
キィ・・・と取調室のドアが許可なしに開いた。
「警部、その人は無実ですよ」
そういって、取調室に入ってきた、その人物は―。

いまどき予告状なんて？（前書き）

アリシア：あら、作者さん五日も間隔空けてどうしていましたの？

ものかき：あ、うん、えーっと・・・。（しどろもどろ）

ユート：どうせ探偵のほうを更新してたんだろ？（ぼそっ）

アリシア：浮気者ーーーー！（ハリセンで一発）

ものかき：ぐはあっ！（みなさん、浮気はいけません。そして今回は短いです）

いまどき予告状なんて？

「『いまどき予告状なんて』ですって！？」
ユートのさきほどの言葉に、アリシアは心底信じられない、といった様子で―それはもう、見ているこっちの血管が浮き出るほどの表情で叫んだ。
ユートはそんな感情を何とか押さえ込んで、言い訳気味に言った。
「だって、この現代で十九世紀にやってたようなことをやるか？予告状だぞ、予告状」
「何てことですの！？」
アリシアは悲痛な叫びを上げた。ユートはそう叫ぶ彼女の病的な白い肌を見ると身構えてしまう。今にも彼女が倒れてしまいそうだからだ。
「古今東西、予告状を送らずに物を盗んだ怪盗がいますか！？」
「・・・えー・・・・」
ユーとは返事に窮する。
―だって、まず怪盗が物語の世界から飛び出して、この現実世界で暗躍した試しが！？絶対怪盗ルネットが初めてだろうっ！？実際に予告状を警察に送りつけたのはっ！
ユートはいまさらになって、予告状がしっかりと警察の重役（たとえば警部とか）に読まれているか心配になった。いたずらとしてその場で破り捨てられていたらどうするつもりだろう・・？
そんなユートは、いままさにある一人の警官が濡れ衣を着せられている事実を知らない。
ユートがそんなことを考えているうちに、アリシアの『予告状』についての力説は続く。
「予告状なくして怪盗は成り立ちません！泥棒と怪盗を分けるのは予告状なのですわっ！」
アリシアはコブウシをぎゅっと固めて熱く語る。

「予告状の内容をどのようにセンス良く作るかによって、その怪盗のレベルというものがわかりますは！華麗な怪盗ほど予告状も美しいのです！お分かりですかっ！？」
「・・・あー・・・」
ユートは困惑する。このお嬢様が作った予告状がどの『レベル』に値するか彼にはわからない。
「あなたも、これから怪盗として盗みをするのですから、ここはしっかりと覚えておいてくださいね。テストに出ますわ！」
「テストすんのかよ！？」
「冗談ですわ」
「・・・」
―ついてけねぇ・・・。
ユートは海よりも深―いため息をついた。このままずーっとアリシアにこんな感じに振り回されるかと思うと、気が滅入った。
「それはいいんだけどさ、その俺が送った予告状、本気にするやつなんていんの？破り捨てられるのがオチだと思うけどね」
ユートは率直にさっき思ったことを口にした。内心そうなってくれればどれだけ楽なことか、という気持ちのほうが大きい。
しかし―。
「あら、その心配には及びませんわ」
「へ？」
ユートの口がぽかんと開く。
「どゆこと？」
「ヤードがわたくしの予告状がいたずらだと勘違いされないようにしっかりと手は打ってありますの」
「・・・・」
ユートはそれ以上声が出せなかった。
なぜかって？もちろん、どんな手を打ったかなんて聞いたら、ユートはどうあがいても怪盗をしない道がなくなるからだ。
だがしかし、そんなことをアリシアが黙っているわけが無い。にっ

こりとした天使の微笑みをたたえて彼女は言った。
「ヤードが予告状を破り捨てないように、ちゃーんとほかのマスコミやネットを通じて一般市民のほうにも大々的に予告してありますから」
「・・・・・な」
なんだとおおお！？

ユート、全思考停止―。
「あら、大丈夫ですか？」
アリシアが心配そうにこちらをのぞく。こうなったのは誰のせいだと思ってんだ！？
「だっ、大々的に予告だと・・・！？」
「ええ、ロイに手伝ってもらって」アリシアはパンと両手をあわせる。
ユートは恨めしげにロイを睨んだ。何てことしてくれんだこの貧弱執事は！？
しかし、ロイはふい、とユートから目をそらす。
―おい、上等じゃねぇか、執事この野郎っ・・！
ユートは静かに拳を硬く握り締めた。隙があったら一発殴ってやる。
「さあ、泥棒さん」
アリシアがそういうのでユートはそちらのほうを向いた。
「がんばりましょうね！」
にこり、アリシアの微笑で周囲の空気が花が咲いたような空気になる。
前言撤回。
ひとまず、許されるんならまず殴るのはこいつからだな。執事はその後だ。

いまどき予告状なんて？（後書き）

なんという文章の短いことでしょうか。
学生というのは難儀な職業です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9334s/

怪盗ルネットの怪盗学

2011年10月9日00時24分発行